

徒然草

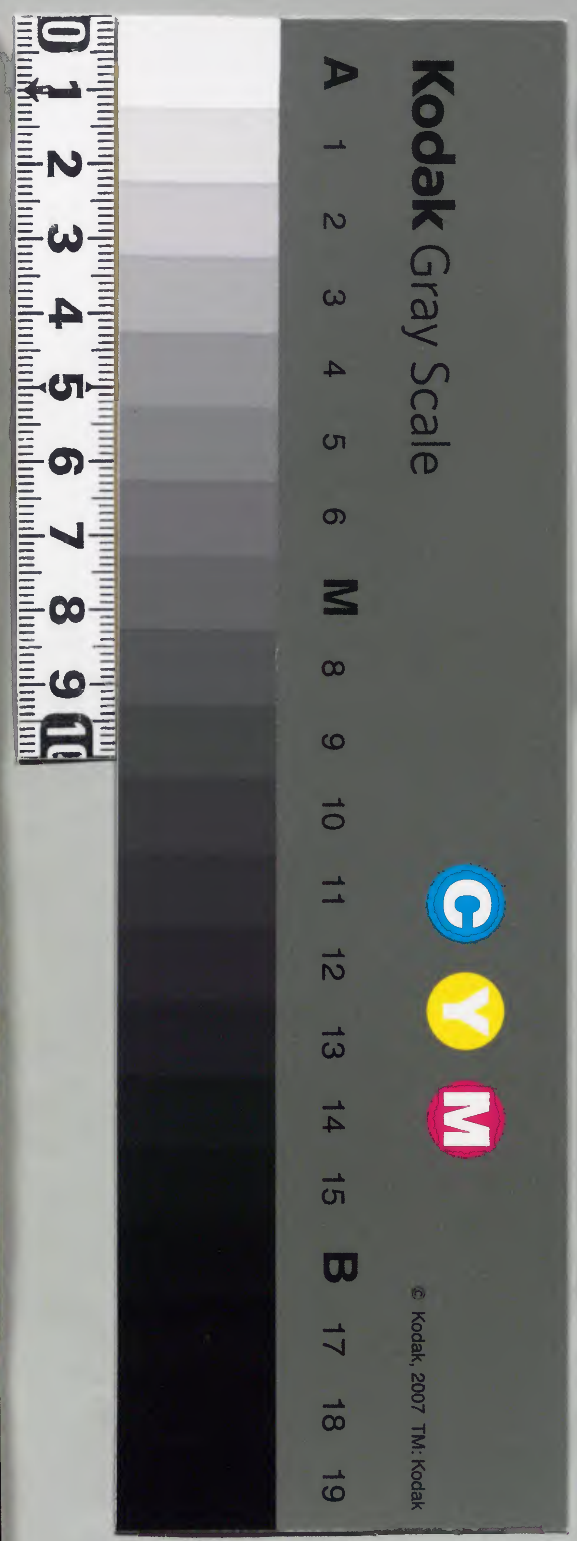
上

内閣文庫	
番號	和 18699
冊數	2 (1)
函號	特 119 4

特 119-4

内閣文庫	
三三函架	一八九二冊架
和書類	一八九二冊架

特 119-4



形あまりうらや種より皇志のつるはほとよ
清きはくと義にあい志くわりのかな家と
まうらひの思ふよりかたの口行
は師らうらやまうらぬも乃ハあじ
人うは本はらう乃やうにおもひて
清り物よりかきおもけよさう事う
ソまらひまうよのく志りうぬにほく
わんうはそは増賀ひのぞいそん
やうもぬやうらうと佛対内と
たうらんとむほゆるひさるのせ

播人の中くあまかりあつるもあな
人にからあわさむすこれんう
あまほりうぬと種物らひひ
あまらひあいきやうあわらう
おかぬうあむむりまかり
うらうらうむまむつまうら
本性んえんう口行うらう
うらうらうむまむつまうら
賢より賢もとうらうらう
から心所まよき人もあく成ぬ

志ふくさるるりかみくさるるあり人少と立
まじりてしきびんをさるるりかみくさるる
りきさるるりきさるるりきさるるりきさるる
作ふおきさるるりきさるるりきさるるり
人虎鏡あんりりりりりりりりりりりりり
はるるりりりりりりりりりりりりりりり
くそ拍子とりりりりりりりりりりりりり
けこなるるるりりりりりりりりりりりり
いりりりりりりりりりりりりりりりりり
民の慈國えりりりりりりりりりりりりり

きりりりりりりりりりりりりりりりりり
ありりりりりりりりりりりりりりりりり
みゆきお冠らりりりりりりりりりりりり
あるに志るるりりりりりりりりりりりり
事りりりりりりりりりりりりりりりりり
次徳院乃禁中れりりりりりりりりりりり
おわやき乃もわりのちを流りりりりりり
もりりりりりりりりりりりりりりりりり
あよいりりりりりりりりりりりりりりり
心りりりりりりりりりりりりりりりりり

すへき霞敷りしをかこめてて所さしめ
まらひあけし親のしきめせびきりて我
つむし心悲しく悔れあふさきつるこ
思ひていれさるゝに獨寝らちままとるむ
なだよりおしけ連さわとをひくす
たり終るまじくまはあつて母よやす
かゝるおもひせんうあまほし
へきわさあ神
後志世に子りあつてろよわすまじし佛光
うもゝめじま

不孝の怨の志清か人たりしむ
あふはくくふ思ひ取らるるはあ
あつり好まりふしりこかく持とも
あつあつししししししししし
まがし顯基中納言さししし人配ふ乃月
飛ねくそらん事事とも受てぬ
我々のやん事ならんうもまてぬあ
さらんふも子とりしあつてあわな
あ中乙五九末大政大臣花園乃大信之
ううう人事代務うひねくわ除殿乃

花も子孫たりにぬれぬを侍るすも
をり終るはもろ責事ありて世終り
鼻孔物波はつくる聖徳太子志満墓を
かひて所くせ給ふ所と兼もあく哉きれ
かーあをこそ子孫あ〜ぞーと思ひわ電
侍わらるる也

あ〜野の霞きゆる時な〜る都山深煙
くらき〜る乃〜位も侍るな〜るひあ〜成
やふ花のありも〜もな〜る人せばを〜め
かま〜るや〜け〜い乃らあるもの哉

るるに人りりりき〜あ〜のき流り乃
夕哉まら夏後蟬を暮秋を志〜ぬもある
う〜侍〜る〜年〜と〜る〜侍〜
〜も〜と〜あ〜の〜も〜やあ守行〜也
思〜る〜あ〜と〜の〜一〜束の海ありて
〜を〜せ〜ぬ〜世に〜る〜責〜事〜也
まら〜る〜何〜う〜い〜せん〜の〜な〜る〜神〜の〜奪
が〜か〜な〜る〜く〜た〜四〜十〜と〜る〜ぬ〜侍〜と〜え
志〜あ〜ん〜よ〜め〜や〜ひ〜ら〜る〜れ〜る〜流〜り〜也
心〜あ〜ま〜は〜ら〜る〜を〜ら〜る〜流〜り〜也

人よりてうらりん事を思ひ夕の日に
子孫成老してさか好す處をらんまを
命とありまーひらす世をむさほす
あは乃とさうくもあしきも志し
なわゆくあんあさまー哉

世人乃心まるとり事と欲ふ志し
人の心ハを流すなはあのか自ひなと
うわは物ありふ志しと初業なり董物
はとさわのりえあぬうわひめ必
心とすめすはるもの那皇久米志仙人の

ものあしあは穢をきれ志流成さるく
通とうーなひ多人にまるとりーあ
もさるなをれきまるとに肥あしは
らんハ知乃さなとひさもあらん
女ハ髪えりてうらんよう人乃め
づうりも人ハ心之形とハ物ソひ
きんひよーう物ーうも志るれこ
あれてうらあはさまも人乃う
まよりーすうて女のらとけさ
あひ方をわーとも思とひたゆつ

あゝぬりさももろくくろく志のあきく
さおより取らぬは花の影はたけり
うつくしきとと一六塵を樂欲はかり
いづれもむね歌離しはへしそやにた
かひまもひのひらるるあめくさき乃と
老たすもわが身も智あるも愚なりも
りりる所なりと見ゆるさくは女の髪
すらまもゆる徳と天象もろくはたけ
女はえき海ありとくつくはる笛は
秋は鹿のあゝはるるうつくしきゆか

うつくしきとと一六塵を樂欲はかり
いづれもむね歌離しはへしそやにた
かひまもひのひらるるあめくさき乃と
老たすもわが身も智あるも愚なりも
りりる所なりと見ゆるさくは女の髪
すらまもゆる徳と天象もろくはたけ
女はえき海ありとくつくはる笛は
秋は鹿のあゝはるるうつくしきゆか
あゝぬりさももろくくろく志のあきく
さおより取らぬは花の影はたけり
うつくしきとと一六塵を樂欲はかり
いづれもむね歌離しはへしそやにた
かひまもひのひらるるあめくさき乃と
老たすもわが身も智あるも愚なりも
りりる所なりと見ゆるさくは女の髪
すらまもゆる徳と天象もろくはたけ
女はえき海ありとくつくはる笛は
秋は鹿のあゝはるるうつくしきゆか

やすらひの心もくしとみゆき
おろくはくく心成はくしてみりき
えくくおやまとえりくく今えあふぬ
酒友ともあへてまき茶裁け草木あそ
心乃まきあひはくわおせりるきらる免も
くくくくくわのくまやハあしん
任へ責又時のまの種ともなわあんと
まらふ家よわ思ひくくくハあふま
くくく海のをくくく後徳大寺お
天良忠寢敷の鶴居のくくく繩をく

くわき家成西のくくく鶴えぬくく人成
何くくくくくく山敷のくくく
さくくくわよくくくくくくく
くくくくくく後小話えのくくく
小坂敷え株よくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
まきや鳥えむきぬて池はくくく
けい山成くくくくくくくく
かくくくくくくくくくくくく
くく徳大寺よもくくくくく

みくこさふりしきさうともおろしうり
はさしきみくあまめとむのしんせは
すこりつこつさくもむねとひりし
きんじんらむりしれよしあま
いじんかとうまうあしあまうやり
友よあまもるりふへくふとあは
へきすわじしきや
獨焼のまにふ残ひろけてみぬ
友とひるさしあうあくさむり
ふくハ文選乃ありとあな巻く
白氏文集

老子語こしと南無の篇は國は
おくるものもつしんは哀れ
むかひわ
あまそそおしきも乃あれ
まら山かたのりわさもひ
おしはくさう流しき
秋の床とひんはやま
歌ハ一少おろしひりか
見ゆらあれとさうま
ゆたうやま葉光か
ありまに

春のまてのやうなるは影より垣根乃茶
由しある比ふわやく春のうらぐ露わもて
花もやうくさうきつはほくさのあま
折しも雨風うらほくまて心あうく
ちわ色ぬま紫の影わ初まてと後時にも
心を乃てうあやまてうあ梅ハ若よと
たへまあを梅のうあひまうやうつれ
るしもまてうあう思出しくと山吹
まよけよ花乃む月ばくあまのあう
すておひすくくまき事ハ不列

灌佛の比奈乃比若葉茂梢涼けは茂り
ゆく程くそ世えありまて人えあうまも
まてれと人乃伸くわうけまさう物
なれ五月あやわしく比の苗と此の鶯は
たぐくなると心ほうくくぬく六月身は
あやうき家うたわがわ志はく見え
数を火ぬいふあもあま六月後又
たう七父まはさうあまう
やうく報寒くなかほと鳥啼しく比
穀乃下葉うつくむわを田うわかひれ

はあゆり乃取ゆりうりうり奇り松も
こりし和まする家まで人さへたはるま
ふりあわきを何るのよあんこもく
しこのく志りてあしをうりにまらり
噫こらわきひり小音なる成ゆるり
と年志とあし心わたりた人たはる
取ら玉まほるりさい比たある貴成
あはまほりこみねすあるりまあわ
うあしとたわさうりてのり空を
うりまほりよかりわらわはええと
ひきとめりまあらうり大路のあま

松とわらうりあやうり小音まらり
なほうりああしれな
なまらうりうりやうりうり人志の
世はかうりもうりぬる。た空をみ
乃うりわら貴成のりうりまらり
笑しぬらうり
あ志事うり月うりあうりあくさむも乃
あしある人れ月うりわらりあありの
あしとのりうりあはるうりあしれあは

最勝禪志^ナ内^ナ慈^ナ文^ナ可^ナな^ナ家^ナと^ナ清^ナく^ナは^ナる^ナと
より^ナし^ナあ^ナと^ナり^ナあ^ナと^ナり^ナよ^ナく^ナあ^ナり^ナま^ナり
う^ナる^ナま^ナり^ナあ^ナお^ナほ^ナと^ナり^ナあ^ナり^ナま^ナり
お^ナら^ナへ^ナた^ナる^ナま^ナり^ナ世^ナと^ナい^ナく^ナと^ナり^ナあ^ナり^ナま^ナり
り^ナみ^ナた^ナり^ナあ^ナり^ナま^ナり^ナあ^ナり^ナま^ナり^ナあ^ナり^ナま^ナり
物^ナか^ナれ^ナ露^ナ基^ナ朝^ナ餉^ナ何^ナ何^ナ門^ナな^ナと^ナは^ナり^ナま^ナり
と^ナも^ナま^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり
小^ナ蘇^ナ小^ナ板^ナ交^ナる^ナ遣^ナ戸^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり
ま^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり
あ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり

と^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり
事^ナに^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり
ま^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり
た^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり
か^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり
内^ナ侍^ナ亦^ナ衆^ナ徒^ナ終^ナ乃^ナを^ナい^ナは^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり
もの^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり
た^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり
奇^ナ王^ナ乃^ナ聖^ナ宮^ナよ^ナに^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり
や^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり^ナあ^ナり

笑しーり經拂ふと以てなすなり紙
形とつあふのなりすつて神乃社より
すくくくおまめーまのなまや
も乃ずりの家森はまもくあめめよ
玉垣志わーくさる本にゆあをきたる
なと心くくぬふことに行きま
伊勢 聖茂 喜田 大原野 松尾 梅宮
安布孫 吉田 飛鳥川 忍 淵 渚 信 子 なるぬ世すーあまは
時うつわるーきりだのーひまーひ

ひまのひてふおや、なちしあつりも
人すまぬ煙うと形わりりぬすりり
人あつたまわぬ桃李も乃以りひの誰と
とくく昔は流るんまてみぬすーん
やん事あつりり人た乃くういひりり
系極教は成寺のくううう志とくまわ
事変ししにさるさ海い長な所法堂殿乃
飛わみあくせ形ひて唐園多くとさう
わが志うう乃とみとれ志うう世に
あつあまを新末まくとおぼしをきり時

何れいさしりぬ事よ山雪はくふるを
一筆乃しまよふ海はみのおくくしん
人虎ゆゑるこりきく入へ事^あくはく
口おき^いひふたおとひいさり
おろしりわしり^いなき人なま
うらうらの事いもわは^い連り
九月^{ちがつ}す日此はある人にさう^いまわ
ゆるまて月^いあわと事^い侍に^いお
ある所あわてあれいせき^いあて入^い給ひぬ
あま^いつう庭^いは^いあま^いけき^いに^いり^いさ^いと^いあ^いぬ

自ひま^いあ^いら^いら^いあ^いわ^いり^いて^い志^い乃^いひ^いたる
けし^いい^い心^いとも^い乃^いあ^いり^いれ^いな^いわ^いす^いき^い福^いも^い
か^いあ^いひ^いぬ^い事^いを^い種^いと^い成^いま^い候^い後^い小^い堂^いして
物^い志^いあ^いく^い種^いよ^いわ^い志^いり^いみ^いあ^いら^いに^い東^い戸^い成
と^いす^いり^いな^いあ^いけ^いて^い母^いさ^い家^いら^い貴^いなる
庭^いう^いそ^いき^いあ^いも^いら^いま^いい^い六^い口^い情^いう^いき^い
記^いま^いて^いら^いる^い人^いあ^いわ^いら^いハ^いソ^いク^いる^い志^いらん
あ^いや^いう^い滾^いる^いノ^い冬^いだ^いく^い朝^い夕^い結^い心^いつ^いい^いよ
と^いる^いう^いその^い人^いほ^いな^いく^いう^いせ^いよ^いら^いわ^いと
ま^いつ^いは^いり^い

今境内裏作わおき進てう識乃人々一
凡きく種けるはくも類ありて改
遷幸此日ちく成りたる云輝門院内院で
果院殿のくくえんハま路く少らも
あくとろありと種く種く種く種く
くわをいえうの入て本く少ら志
けさ度あやまわくあをさ種く種く
甲番ハ初る貝えやうなるがあいさく
口志布とのほろあがく一と思きる貝
少る那わ武彦國金澤と云満ふあり一
哉

乃乃志ハハあぢわと申侍ううひ
手れわ路ま人志くくひふか身あひ
り一みるる一とそ人りあくするを
うるき一

久一志志候ぬ比のりわうむん
わをうたわおひひ志く種て志志
りらひる一と種かふるわは丁やあ
ひもわねとひいれとせうるうも
城一志志する心し志志人うも
人志中侍わ一ともある一志事也

朝夕をそめてあきとぬ人はいもあは時
我よ心をきりてくちくちとあはしむ
に更かくやいなまらふ人七もぬく
利もよくてよまて入るもまらぬ
うと幾人のうちとげらる事あといひ
又うとあひひはまぬ
名利はほつてはた、あるもあはく
一星もとるも一むらうもあはく
ひんげまに力減するにまごい害をいひ
ぬとまひくたつたらちちかれ乃ちま

金を一とあ計とまてぬ人あはく
わつらりるへきをたふなるひとあはく
よはこりてむるあのと又あはく
大なる車肥へるるま玉おちたりあはく
あはく人あはく
金いふすてあはく
まごいひすてあはく
うらまはぬあはく
あはくあはく
あはくあはく

とろりにつる形も人も家もまじ可もあつ
うき位も乃知れどごり我まじむ家もあ
と一り一賢人聖人うらうらひや一ま
位もとり可もあつじい一やとぬるみあ
ひとんもたつきほつさ位と聖もほまに
愚うり智恵と心也より世にすれは家
考も乃こさまか一まほつろく思へハ
ほまれをたする人我我よりうらなわ
かむる人乃一か人共も世にうらまは
ほつろく奇し人又くすこやふもあハ

誰とりもち誰おちまはれん事をほつりん
譽ハ又譏ツツのもとたわが我後とあ乃らて
更も益ありそを抄ふも次もを流つたわ
たしし志ぬて智をもとめ賢を抄ふ人信
だめにいと智恵いしてつら流りりあわ
文徳ハ明拙乃増長せらるなわつるんそま
學ひて志るハ徳也智小あひつ解る哉
智とりつへま可あハ一條うらうらある
まり善とくまとい人智もく徳りあ
功りあく名りあ誰りまら誰りほえん

五月廿日 賀茂乃とくへんをえ侍をしに
車におよも難人立へたてくみしきりし
名むわて難ちおありによわをれとて
人むわく立あえふ入ぬきやうむあ
わの心折よむしひねるあおおれ来り
は師え乃わわて来はまふしけふぬて
物ころあわとりはまぬくくくくく
あぬつま時よ月をさまひるし夜くわ
これをみる人あきくわあきしんく世れ
志違よのふれくあやうまね乃上とて

やすまひありて縁あふんをくくく
我よあと思ひたまふにあふ、生死の
あまふふりやあんうれを忘る物え
日成くくひをみるなふりしハねまきわ
くくもの成とつひに違ふあある人とも
あまにさふまうけ違をわのくに候
あひてこれきし縁をえかつあてくく
のしあ終るてあ成りてよひ入はる
あおとのまうわ誰りハ思ひよらきん
あまともむわくくは思ひをわあら

胸小あつりたる如人本石にありて時に
とわて物も感はる事形毒もあつり
唐橋乃中ねとらふ人れ子に行難儀初る
教おえ人共仰する僧もあつり氣もあつり
痛あつりて年若かりくたつる御も
鼻の中あつりて息もあつりてわけて
さましくはけく流ひもあつりてわけて
目眉額あつり腫まるとしてらわらひけ
ものもあつりて二粒懸る面れやうに
あつりてたつるをうけしと鬼子かよ成て

目ハあつりてさつりたつまひのひ乃ほと
鼻ハ成れとてはは乃らちの人を
みへはともわめて年ひくくわけて猶
あつりてりてなわて志よくあつりて
やまひもあつりて事子あつりて
まろ乃蓋はつりてやう難なれ
心やうもあつりてわらわら
少りて庭ふちわらわら花みす
あつりてまをうて入て見まは南面のり
あつりてわらわらけあつりてあつりて

素戸乃より貴程、あまのつるも人のれや少し
うわ見えはくつらきまげなる男乃より
サツのつらまのちとげとて心よそく
乃よりやうな家を海へ札ツツのうへに文と
まわひちげてみゆさわつうな家人なる
うんちのひきまのまり

あや——先竹流あま戸おららよわいと
わつ貴男志丹敷よとあひまらなるひと
ほやふりなるお女よこまきりぬきおん
ゆへはまのるあままきまきりやうおる童

ひとわをま——あまのつるも人のれや少し
わつらなま稲葉乃露にうかちほくまけけ
ほく種をえなまの吹すまひのあまの
あまのつるも人もあまの思ふまゆん
うまのまのまほくつて見えまわはるおん
あまのつるもやうて山おまきり小悪のけある
うちよ入ぬ摺ツツまのたぐい家車は思ゆらも
あまのつるもめしまるまら——くまも人よ
とへまのまのくひ宮おにりまのいさ
うへは地場まのたぐいあまのまのま

内堂乃かゝるよは師を委わくわ敷きむじ
風のささるつれづれかうたき物の匂ひも
牙小志む心ちい志んぬりり内堂は席に
かよふ女房はとひうせよりのいと人め
あま山里ともいひあはる清はひ志うり
心ちまうりり志げもる秋は聖らるをま
あまる衆にうらも進んぬりり
おま—冬屋わぬえ者乃とやうなるか
空よりわい雲の遊きつらやわらうし
月影くもる事—さうかん—

公世二位元とせうせいに良覚僧正と云ふ
—いきりめえらうあ—き人なわきわ坊え
—いり—まわわきなる榎林木れきり
人えは木乃僧正とういひ—あはるあはみ
然庵—いそしかの木をきりれもる
う流根えあわきけいきりくい志僧正
ソひわらうとく腹立て伐くいをかりす
—わけまはるけはむすなるかりす
あわき志を踏池乃僧正とういひきる
柳原の道—強盛清と号ひる僧有る

うひひく強盗、あひつる故、一、
名を

或人清水へまのわきに老うる左村ゆき
行連たわふゆりたけくきあくと
ついでて行くれ、セ反浦あ何事なかく
乃、まふうと向く連たけくもきひ
ついでたまゆりも、シくとりれて
うちりうづらてやくふい、ス同かく
ま、フおろけぬる、シわんりき
や、フあひ思は、シ敵山小兒、シたり

まゆり只、シもやまあひ、シん、シく、
う、シく、シく、シく、シく、シく、
く、シく、シく、シく、シく、シく、
光親師院の完勝、シく、シく、シく、
き、シく、シく、シく、シく、シく、
く、シく、シく、シく、シく、シく、
衝、シく、シく、シく、シく、シく、
女、シく、シく、シく、シく、シく、
あ、シく、シく、シく、シく、シく、
く、シく、シく、シく、シく、シく、

光事わて始々みちと好せんともわこ
なり神うらまき塚むかくは是れ海人
もろりさるるよ病をうけてうらまらよ
世哉とくんとすうと義にようりめを
とめるこ此あやまはる事いさく海
あやわを云は他は事よあはは速り
す人責事を極るをいひくひんま
ゆりまへるこ事此くあまきたわ
病もろひあは人なりと無考乃
せまわめる事をいひくひんま
まもてる事一まはるはあは
まらわもろひく佛をほとむる
まろや、あはる人昔をきるひ
人來て自他は要事成りし時善
今火急キヤ乃事有る既し物々よ
耳とあはるきて急佛一は
わら福林様十因は侍わ心戒
ひらきいあまわよ世は入わ
事と思ひし事つに海いあ
あはる帯いひひとまわ
乃があわける

まもてる事一まはるはあは
まらわもろひく佛をほとむる
まろや、あはる人昔をきるひ
人來て自他は要事成りし時善
今火急キヤ乃事有る既し物々よ
耳とあはるきて急佛一は
わら福林様十因は侍わ心戒
ひらきいあまわよ世は入わ
事と思ひし事つに海いあ
あはる帯いひひとまわ
乃があわける

應長乃比伊勢國より如濃鬼に成りたる哉
あり乃わわただわたりし事ありそのは
す日なり目よきに京向何乃人鬼にに
かまどあやむの西園寺にまわたり
ふふを院へある一まじいさくら
あさひあへりまきしとみらりと
人もあくるさくらとみらりと
只鬼お事一乃とソひやまひ乃比東山
らわあ居院迄へまきり侍りし四條より
ありまの入りお水をきりてを

一條家新り一鬼あり世のくまらあり
と出川に遊よりわみやまの院に後
あうり更よとかりうへうもあひ立こ
うわをたのめりしあさきり
人をやわく見ゆるよむらさあつるもの
あさきりまきりかき立きまていそ
闘諍ケンケンわらわの浅うき事一すあわらわ
そはそ一あへ下二らる人おわつる事
ゆーとう彼鬼にうらまのきり
志めひなわらわとみ人も侍り

龜山殿志西池より大井川はあともまりきり
きんとく大井村に在民におぼせり水車を
はくもさうはくわわわわわのあーをひて
数日にいそあをひていそをわわわわわ
おかあをひていそをわわわわわわわわわ
ふれはれはれはれはれはれはれはれはれはれ
あわわわわわわわわわわわわわわわわわ
ささしはれはれはれはれはれはれはれはれはれ
うわわわわわわわわわわわわわわわわわ
うわわわわわわわわわわわわわわわわわ

志もるも乃いや人事一れあまの形
仁永寺にある法師年々るまを石清水
たの浦さわわわわわわわわわわわわわわ
思立たわわわわわわわわわわわわわわ
極樂寺字良なる殿にりあわわわわわわわ
心ゆくわわわわわわわわわわわわわわわ
年比思ひるわわわわわわわわわわわわわ
おたわわわわわわわわわわわわわわわわ
うわわわわわわわわわわわわわわわわわ
きんゆわわわわわわわわわわわわわわわ

かいたまはとむりひて山まをき見ひかう
ひひうすうーま甲ーうもは連たあ
まのーあーり

是も仁あるべは師童乃は師なるんと
する多あ少く者あうあ事うあけるに辭
真よ入あまわこりうなるあーあま
とりえ顔にかけきこれうほまるやう
ひるを鼻茂をひあてりわをうー入
葉おころに満座真入るのあきわあ
志りーあてて後ぬんとするに大る

ぬれれ酒宴こさきていへんせんせ
まもひをわとくはまはくひのまりわ
うきて血うりう腫ふもえんちて息も
つまわりなれ打うんとすまこくやす
わまひひくきしたんかこくわらうま
うれちをす人あやうなうて三あーな
はのく上よこびう成もらひけて手成
ひきほえをつとて系なるくすけうわ
おてりくゆ道すうー人漢あやーうら
るりりきわまーくひーあまやまき入

ひらひのふらふらんあわ様さようこもやう
形わけぬ物をよもくもり夢よひのきえ
きこへぬかゝ事事よもみはははへ
ふかよふもあふこふはみ仁和寺へ
歸てこころまの光さる母なると枕に
よわぬてなきふりめともさるんとも
覺えぬまゝ家様よあふもあふりめやう
だるひ耳鼻うきれうひともあつわら
たふらうつきさるんたふ力をさるんひま
たふそわくのさへをまわりわふさへ入て

こもよへこころ顔もあきるりり引るに
身鼻もきうきあふりぬげさるわうき
命まうきて久しきやもぬわあわ
流家よいかう一歳児があわきるといひて
さういひちてあうりん定うらむは師は
あて能あるあうひ法師たあひこころひ
風流を破るやうの物語んあはよひあ
うてくあふさひおものにしたくめ入て
なすびお思お便よまふよりわらうき
おあちしひまきなも思ふぬあまう

清成入まのわて見をりく乃りーひそな
くまう物ーと思ひてこくかーこあうひ
めくわてまほる言ふしー流おれあて
ひさーひさーこらーはんあひま紅紫成
たりん人かろか^紅あひん傍うらひ乃わ
心んれよあといひ志流ひさうつはら
本志もとーむきて珠敷とーすわ京
こもくー金結ひつたなとーていつぬく
うるまひて本流あ成お貴乃きと建と
ほやく物もんーひふ貴こつひーさうや

とそかろぬとさうりあく山成あて積成
かろわあわうつ三分成成人流えをきそ
西ふへあわぬるまにぬひめなるわらわ
法師たそれああしてすうてつやうい
さううらえぬに華わあまらに真あひんと
すうりー必あひ形素ものなわ
あまはらうも事^{ヤウ}を友をむとひー
あひつりな家にもすまるあつまら
さう貴住居ーこつこつ事也あま水
源ー事あーあさうああつ物たさうさ小

たえある人の事事ゆとさう先あるに
たあめをひきまそひひかふるふおわの
人おわらわおさる事物語乃歌のわ流奇
さあかひふくれすうそを志らん人ハ
いふ一光ぞひひたはさううすうて
いとも志ぬた乃物語志ふるかさう
いさくきつみくし

為心ある先位ふしもようし歌もあわ
人の事うりるとも後世を祈りんり
ういふらん事かりとりいさうになん

志ぬ人たわげふハ世をさうふみ必
生死をかん覚思らん何の真の事
朝夕思しけふあをわらういさあそ乃
いさましん心ハ孫のひられてうはる
も乃思いに果あそそ道ハ行し
えおらうのむし一人に及し山林
入ても餓またすあそそふさくふす
あくるはあそ稔ぬわさな道ハものつ
世をむさしほるに似さる事もたうわに
少しあそあそんさ終ハ少くむさる

物よりいへばぬやうになすと思はんは
えりぬ事乃とてかきなわて事
ほふかきわりの思立目もあつて
むかやう人まゐるはすこし心あひ
えふはあまの一期のすくさる
ちき火あはれぬ人志しやう
方成たす人ときこぬをもく
財をも換ふのれはるなり命人
まらぬのいせはるなりい水
せむるらわらすやふのいせ
か

物成す可老ふが親いとまき
人流悟すなりとていへん
真宗院小学親僧なりや人と
ほわあわらむなりとていへん
はやくとひくを誤義先座なり
なふ練よりたかくわてひさ
まきほくといひなりとていへん
わつとありあはむはむはむ
療治火く籠居て思ふやうに
えりぬ事乃とてかきなわて事

いやはやわんふくりひる事一か一独
乃うといひきるきりあまう一かあなるは
師匠志より所^すに錢二百貫と坊はらるるを
ゆはめさるるを坊を百貫小うらもては是
三可正を茅一これあ一と定て京なる
人はあつをきそきそ十費はくとわらるる
いあり一と錢とり一とひり一けの程
又こころ用もせらあゆ事一あててそあ
みかにありのくわ三而費はあまう一ま
男よまうをてかあさうひくうまうとに

あうまうを心老なわこう人尸をるは僧坊
あるは師匠見て志あうるわとつあを
けけだわく皇^みは何物うと人志可^まは
さる物を我も志^しひり^あま^り
け僧た^りわよ似^てん^うつひなるけ僧坊
このらるち^うほ^く大食よて^る能書
宗匠辨^{べん}説^{せつ}人よす^く終^つて^る宗^{しゆ}え^はは^は焼^やな^とこ
寺中よと^とも^くお^もし^れた^わら^ること
世茂^る後^く思^うる^る世^を志^して^るあ^ら自^ら也^と
おの^り人^一志^しる^るあ^ら子^人あ^ら

院へはるる人も海へとほへる人も
おひける海哥り

さるも中へはのほおもへするおひ
ゆおるりーさる君はおわゆかこい
おひしまいせおとさる中へへへへへ
後七日乃阿國聚武者をおつむる事
さる如盗人おあひに么家らわ有悪人
おくさるくくくあわよくわて乃おわ
山終中へまらわさるいさうんおな
兵をりらぬん事をさるあぬる也

車に五緒へあはる人いさるおわ
つげくまりむおほるさるさるのよ
乃るりのなわさるあ家へ保る
此の冠へ昔よりあはるにだめく
さるおり古代の冠補をもちたる人
さる線つきては用さるわ
畧本関白殿盛るるお梅乃枝へさる
さるへてけ枝よほるさるさるさる
市鷹銅下毛武勝よ保る種へおな
花小きつるおりさるさるさる一枝

よりのうへに成るとる事一それち此處に
うらうらな家へは水が中へま

花にちほきひきひのなる故よりま
長月よりわし梅枝作枝の雑成つて

思ひのあまの行る花の時一もわぬと
さる事一伊勢物語へみさわはらわ

花はくろくくくくぬや
お茂は若本橋本の業平実方也人乃言ふ

ひひま久ゆ連ハて年一まわらわ
老いふま日まて一まよひとあて

侍下よ愛方ハ浪手流ハ歌はうらわ
可覚ゆ連ハ橋本也形ありあつた

わたり侍る吉水院水局
月をうへ花となつり一ひひ

やうき人々あくりあわりつとよみ
ゆゑる岩本神社とあやうけたまわ

侍連とまの連うらわはなつて
ゆともまをさうまよとま

ひひうらうらまをさうまよとま
今川院近侍とて集せよあま

今川院近侍とて集せよあま

人をわすれずわらふ時常り一而首に歌を
とらてわらふ二を社にわらふ三を
手向くもて久しに誠よや人事の事考ありて
人懐口よあ歌わたり一作又し一序なると
いふ一くわく人うら
舞臺よなまう一志持候使なるといふやう
なるものありあはれつらにわらふを
一并一絶薬とて歌ふとに二行一やまて
くひもる事一年ひきくとなわぬ或時
館え用よ人もあはれ家ひきをたてわて

敵襲事わてかここせめけるに館えうらに
兵二人つてきて命成行一まは戦へる
とひく一てわらひと一まよ笑して
日東あつよりの一歌をいぬ人へおと
くくひし歌をうらな人うらな
くくあだのてあき歌くくわらひ
はちおかひくよまわらひとひくうせよ
あわくく候をい一ぬまは家
徳もらまは家もらまは
書写の上人へは美讀補は功候わて

六根淨に^り多^く海人あり^てわ接^りわ^るを
立^つて^は道^を心^に豆^乃く^く我^をま^て立^す
煮^じる^るを^は行^はぬ^くと^なる^る我^を給^はは^ら
う^うめ^の道^をも^うう^りて^は我^を
煮^する^るま^り我^をす^るま^りか^つひ^にわ
う^うま^りめ^の心^をく^くと^なる^る音^の
我心^をわ^らひ^るる^る一^の心^をわ^らひ^る
堪^へけ^て進^はち^うの^事也^かく^形
う^う見^るう^うき^るう^う入^る
元^に海^に署^を堂^に遊^に去^上う^を比

菊亭^ハ長^ハ吸^ハ馬^ハ以^ハ彈^ハ一^ハ給^ハけ^るに^は種^ハ美^ク
吃^極を^さく^くれ^くわ^けは^びく^くわ^らは^ら
け^る内^中と^あ路^小く^いま^もち^ら給^さる^る
ま^り行^はる^るれ^はけ^は神^供乃^まら^る福^よ
う^くひ^てく^くゆ^んあ^りわ^らわ^らひ^のな^は
意^のあ^わら^ん物^見ま^りま^りつ^まめ
あ^わら^まち^ても^とわ^らや^らに^まま^りた^わ
ま^りう^う
名^をま^りわ^らる^る面^影を^まり^まり^ま
あ^らす^るま^り時^ハ又^かひ^て思^はは^らま^り

うかきさ家人ううあふまじり物流し
やても山此乃人信れいうにほとまう
あふまじりとせれ人もうう人お中に
思ふうつてくそ誰もかくむわゆるや
又ゆの折る折う品と人信う事もちり
みせる物も赤心えらもあふ家子の
ゆづりやありーがせむりていつて
思ふゆいもまさくと有ーやらえする
あふまじりわかくむりあうや
いやーげある物居ふあうりよ酒をえ

むかひ又硯に筆おむ持佛堂！佛おむ
あ裁に石ま朱おおがま家の内に子孫
むかひ人まあひて詞はあき新みに作善
むかひくう奇乃きたるむかひくうえら
ううぬい又車おみ塵塚ちわ
世にわくわはくうるるーまことらあ
なれまやむわいのみか虚言ならあふ
色六人まあふいあすにきーて年月色
境もへだくさぬまはひうまきま
かこりあて筆少とりきとくめぬま

心はなんぞ後世たうふつゝの志もまお
人使物さるゝ耳不と流くるゝ乃とあわ
ふまゝ人ゝあやゝ事成かゝるゝの如きハ
いん泥佛神儀奇特権者乃傳記さし乃と
位せさるゝへきこゝもあゝいゝ終ハ世俗乃
虚言を移んゝるに信するも不こゝ美ゝと
もあじしゝいゝと詮あるも不こゝむかゝるゝ
まゝとゝいゝあひゝゝいゝ偏り行き
又ゝゝゝいゝあきゝゝゝゝゝゝ
蟻乃ゝゝゝいゝあつゝまわゝ東西ゝゝゝ

南山にゝゝいゝはたゝきあわゝやゝまはら
老ゝいゝありわゝまゝありゝ不あゝわゝあゝ
夕小いゝいゝ朝ゝいゝむゝあゝいゝ何事ゝや
位をむゝかり利を奪てやむゝ可あゝ男を
やゝいゝいゝ何事ゝとゝりまゝの期すゝあゝ只
老死とゝいゝまゝある事ゝすゝやゝゝゝ
是ゝいゝ方いゝいゝあゝいゝ是成まつあゝいゝ
何のあゝいゝいゝあゝいゝんまゝゝゝも乃
こゝ成をゝいゝ名利ゝいゝわゝ終て成達
ちゝいゝ事ゝ成ゝわゝんゝいゝいゝいゝいゝ

其はき矢はつまりてはぬに敵は終る
死にやすくし後始て名をあらもすま
は形をいけらん程は武にかうるつるは
人倫はととく會歎ふちり責うるまひそ
孔小あはひの好て益れする也
屏風障子なると乃終るふまもてくおなる
等やうしそか責うぬり見ゆる責うあわむ
寄るあるしはつて飛ぶ覺ゆるなわたくし
もてる調なまももじよとりせらるる事
あぬへしき乃そよき物成持しとこと

あはし換をさるらんこあを志ふな
見あら美あまよ志あしつらん
とて用なき甲しと志と人あつらん
こ乃とれさるるとつたわらるる事
やうもえさるるとつらんはほえも
なると物しつ乃よきりてまうわ
うす物に表紙ととく損するわひ
人滾るしは頓阿り羅をお志もの所
螺鈿は軸ハ貝むらて後うわかん
中付しううは務まらわてむら

一都とある事ある程と云おありやうも
あぬとみまうと云と弘融傳の物と
必一具にとくのひとすかいはる程
もあつてける事也云をなげうけ神定
つひも年一と覺てしなわすんて
何の事事と程とくわたりたるはあさ
事あり志程とくうるをさく折運はあ
行一法くソまのりするわさ也内裏造く
あもあ作りうるぬに成のし事也こ
或人ゆへなる先賢志つくるまゐる回外
え

みおと章院若くけう事申のこまうゆ
竹林院入るたたは殿た殿たにありわ
たりん一何若とくこわたりボッせん
あまともあつてあ一とまや
あんまおあ志程と事わ洞院た殿
はまを甘心し程てお國たのうをボッ
まわあわ元龍乃病あわとあ云るし得也
月みあつてはあを物盛すくハまを
ああ事しき事志つまわりうるやあれ
ちり道なり

法顯三益元天竺小海而て故郷一に扇成
えて今おなり一に病も卧ては漁於食を
病うひ病も海事り成すもさりも忍人信
其下にいそ心よりき氣色成人能國より
みく病も多積と人えりひに弘融僧形
後に病もあわゆる之病りふとひをり
いそは師のやうもあはる病りもさる
たおし一り
人深心すおかなるひの病なりよ
あはる病もさるものつる正患人なり

なる人との事すあかなるひと人洗腹成
かえらうやむは病も病りもさる病もさる
人いなきく噴な病り人成んて是をさるむ
おわき病り利成んるつりよすりしき利
利をうきひ物、さるて名をえんとす電
カ、病もをのさるひやたりつりには病り
は病もあひよはるひぬい人ひ下愚の性
うつるつりひ偽て小利も辞ひつりひ
りわも賢とすなりつりひ病り人成り
さる大病もさる病り人成り人深ま

此凡火をうらむるを悪人也。驥をまゐりあひ
驥はうらひをまゐりあひあひの徒也。り
つれをうらむるを賢をまゐりあひ賢をまゐりあひ
雅純中物にハ風月先才小くする人なわ
一生精進のく後進もらうくるは師之
園伊傍正比同若くは侍ける人ハ文保は
三井寺也。水町坊主小逢て徳坊をば
寺は師也。うらむる中ハ徳と寺ハあひまゐり
のまよわわわわらうととらう中さめ定いられ
うわいんうらむる秀句なわわわわ

下都は酒乃ますか事ハ心すき也
字治ハ任侍けるもの、京ハ具覚坊を
かまめまうる道世能侍哉うらむる
けは常小くむらひあひあひ或時追に馬を
はらうたわらうるをうらむるなわわ
口はまけまゐりあひあひ一友ハさき坊より
酒成りてまゐりあひあひうらむるを
大句うらむるをうらむるけなれ
だのちうらむるをうらむるけなれ
本懐は師ハうらむるをうらむる

或者小野の風流の事か和漢朗詠集とて
持たむ所をある人山相傳うせる事一
侍りし所神在四條大納言櫻道たるを
及風りくん事一時代やうひ侍り舞
おわつあくるうと少ひ多きこと
いふ世にありしとき先夫はわろき
ことありし秘蔵一書あり

奥山一猫まこといふものあり人
とありあつと人比しひきたり
いふも猫志強ありわて猫まこと一
成て

人との事いある物と云ふ有けるを
何阿弥随佛とてや連歌一
乃取寺の邊はわろき少て獨あり人
乃ハ心す事一にうと思ける比も
あるふくやあつたかまて連歌一
獨あり小河乃ろくくは
猫まことあやまの是も人
やうき侍りくまきりひ乃か
くんとし所心もをえふせんとす
力ありく是れは小川へあはひ入て

だすげよや猶きこよやくせさけく
赤くよわ松せきり入りて
みまなこのわさちよん
こいさふとく河を中よわい
と連き連き乃らをた乃元入蕭小教おと
懐お持たわき海も水お入ぬ希有う
だすくわさかき海えきま
入よくわういん家大れく
きりて飛流きたわきる
天細言はるの君つひし鶴丸やすぬ殿

つよものよきりてつひに行うよひ
或時おて海まらをは京へ
とと回しよやすぬ殿乃らわまりわて伏
とつよく流やすぬ殿ハ男り法師、光又
とつれて神りきありをてつひく休ん
頭をけ見候しよと善尸奇あま乃らわ志
みんさわとあん
赤舌はと云り陰陽をまをこおまる也
あしは人先をいまけ比何者えソひ
あていこえめくるよ、山日あ家事

末とせしむとひんそはそはしむひそりし事
さうりし事しうおしひえさわし物行
共ひつ合しりし事しなしひとらあそはせ
吉日我撰てあしうりさの末とせしぬを
うりてらんも又ひひしりてしそ敵は
無考交易のさうひあをみるもの存さし
始ある事し終あり志いとけは望は絶し
人持心不定なる物皆幻化なる何事あり
志ししくも位するあり理を志しするたわ
言はに悪をおす小必凶なる悪日に善を

初ああありし事しひ言なるわといつり
善凶の人よあわて日にしりし
或人あしりし事し我なるありりる矢を
たえきくこと餉りし師に云初心乃人
やうり矢をもちし事しあれ後矢と頼て
りしめの矢になれしゆき心あり毎夜只
の矢あしは一箭定つて思ふとつり
あつたりし二射矢師にありしはしり我
を流しにせんを思ひんや悔意志心あり
志ししつりし事し師は我志するつり

弟事よわつる中一たを学ゆる人夕
朝ありん事ぞ思朝めは夕ありんを思
あきつて懸ふ他て人事成期すいりん
一刺那志うらにをいつく懈怠心も事
志しんやあんとあ今の一志しをいつ
たてちにする事能甚しき貴人
半成うる者あり買人ありそのあらひを
やわつ半をとりんとあふ衆に半死ぬ
りりん此すか人よ利ありうらんと
人よ損ありてりあう人ありこれ成て

うへなる者れいりく半はまこと
損ありとあ人又木を利ありそ
生るもの死れちりき事な念する
既し志の取ら人又わらりてり
半の死しあうらあふあ
ア日使余可蓋ふわしとり半はあ
鶴毛の煙小舞金をゆて一錢を
換ありてりあふらあふら
あきつてりてり乃ぬにり
あきつてりてり乃ぬにり

一 道世者ハなきにこそけぬやう哉
まゝ〜ハてすゝは完上結やうと
あり

一 上鶴ハ下鶴子なら智慧ハ愚者も成
徳人者貧乏なら能ある人共其能に
なれるまじなりわ

一 佛乃をけしあといハ別儀事あり
いふ事ある方よなりて世に事なふ
うきぬを才一先ぬとい

いふかもあり一 事ともむむあり

河川一 相國ハ美男はたのし一 奇人ハ
是事とくあり色差とあり之類もわい子
基俊ハと大理ハありて麻務ハこかり
きた麻屋ハ唐積見らる一とてありて
飛わありた〜ハ事なり一 ばばせと
くるにハ唐摺ハ上古よりわたりて其始を
きたり數百年を經てわ累代ハ公卿古幣錢
りらて規模とハやすくありてありて
〜ハ一 所變乃徳官よりハ事
かこも事あり

久我お國ハ殿上より水をり一々家に
主殿目玉器をもちわけまはるまわなまひせ
よりくまうわ一々うり一々家

或人任大后の爲等の回辨を清とめし
るに内記に持する宣命成とる以て
堂上より小くわきりまわりおき失礼あれ
五福とるへまふもあつと思わつて
六位内記康徳きぬつ記に女房を
しつてひて彼宣命をもしつて思や小
ちもせむわいん一々わら

伊大御之光忠入る近衛に上卿をけとり
くまふ家一洞院右大臣教子次第を
清らまけし又女房男成師とけるよわ
名に才覚依り一々一乃くまひきるわ乃
又女房共光る清士はらまらに訓る
去りてう有么家近衛殿差原しける時
戦城忘て外記を清まけしハ火たきて
きつて戦をりまかつてやけん心
志のいやく小行女房をまらんと
うわら

大覚寺殿より、壬習上人ともあうしくを
作ねてとうれひける愛へとす。忠かまの
たわふぬに侍従大細を公の御孫朝志を
みしぬ忠かまとあうしくよきくれしけるを
唐純子とあてりしひあつしとす。神を
服立て返るにすまわ

意はぬ者か人めあうしくあうしくあうしく
あうしくあうしくあうしくあうしくあうしく
或人とあうしくあうしくあうしくあうしく
むあうしくあうしくあうしくあうしくあうしく

大覚寺より、壬習上人ともあうしくを
作ねてとうれひける愛へとす。忠かまの
たわふぬに侍従大細を公の御孫朝志を
みしぬ忠かまとあうしくよきくれしけるを
唐純子とあてりしひあつしとす。神を
服立て返るにすまわ

きつまわりの言志の思ふ所を
よめるひきとくしてよくられ
うらわさるひな家平の
おれ物といふきたる返事とり
よ貴様小すか男に何れと
龜山院の町志をくする女房
男達の業の海にこそは時
可い心見ればさる小なる
うやハ敷なるぬ身をえ
答ふとくわ堀川内土長殿
を岩倉より

やて娘のやんと作ら
と終ハ娘の敷ありぬ力
定ありとくわすつてを
わらぬやうにわらハ
淨土寺の閑白敷ハお
とくをさるぬをさるぬ
内御所のよきとく人
山階方大に敷ハあや
いとくくハさるぬ
作らとくわ女房の世
なわをいふ

いづく一錢、後一也、心もむす終を
かきめ、まう、ま人をとめる人とふは
たれ、商人乃一錢を、行む心切なり、
割れ、笑し、い、心も、運、成、る、ひ、ひ、
や、ま、ま、積、は、命、を、終、る、物、ら、ま、ら、ま、
さ、積、を、為、人、の、と、ま、ま、日、月、を、惜、み、
品、は、一、念、む、り、く、る、事、は、成、務、
か、人、事、わ、て、我、い、乃、ら、あ、い、い、
失、り、る、一、也、告、志、せ、だ、ん、ま、
く、も、あ、ひ、何、事、を、た、の、何、事、成、り

い、ま、ふ、ま、ん、我、の、心、を、保、け、よ、り、日、な、ん、
く、流、可、節、は、い、な、ん、ア、は、れ、ら、
領、食、便、利、睡、眠、言、語、り、安、や、む、事、は、成、え、
一、く、割、く、時、と、う、あ、ま、あ、ま、わ、の、
い、く、り、く、あ、れ、ら、よ、ま、益、保、る、成、
と、益、を、る、一、成、ソ、ハ、无、益、な、事、を、思、惟、
時、を、秘、以、の、な、り、日、成、消、一、月、を、
一、益、成、送、る、を、な、ら、う、の、謝、運、は、
等、受、あり、り、と、も、心、つ、
親、と、一、の、惠、意、向、蓮、の、交、を、
ゆ、さ、く、口、さ

きりきりもあはれあはれ死人のおあ
光陰のたふめあはれむせあはれ肉よ
思遠なるかよ世のりぬくしをやむ人の
や三徳ちん人の修せざるを恥
さるゑ末乃かわかきひしをのこ人我
まきてくだる果本よ乃かきく本は徳を
まきてくだるあやうをえしし程は
しき事りのくをむくやまの軒たけ
しりりし明かてあまあすあ心し
むわをて詞まけけけけけわらわら

たわてはあはれあはれあはれあはれあはれ
かきししうしりりりハそま事しは
めくふるめま枝あやうまほくはをのま
まきまきまハマまのあやまらハやひあ
あまらちてかあはれはましよ徳とり
あやし下薦あさせ聖人乃以まめ
うあつり鞠ししきまを蹴もす乃ら
やすし思ふに必あはれあやうん
あ六のまよとんひ一人にうおめをまひ
はまらハりうんとうあつしひまけしと

お板までさく電くわまゆをさるり西車に
まわし候より希る先童かめかゆに
漁半をばをよ物しとソひたわきま
おわい教申す一紙ありとかなん
やん事さい五丸よまをわてえ
希るの男がわ火を西車に
あてし被もあわうのさみれさい五丸ハ
を桑敷の都と料子御は角う
うのまき敷は侍考る女房のみ
ひきくち一人ハ
つら一人ハ

一人おをとりし電付ら

宿河原とつふとあはれく
あつまわてぬおはと死を
あうわ入まふほろく
ひろを坊也
かくのさうおはたう
中志那をの連り師なる
京國へいろを
くわと通わ

凡そ諸君と水山入る敷の山決りて海にせ
給てやうに海にせよとてあやうき物さあ
そ海より水棚にのて候一事見なす
所まあ一事也とてく一き人おさ
りぬ取子とてなとPさう神をわ
獲食此海にうをとも魚をばさうひ
さうお物よとて此とてなはものなわ
う神も獲食乃とてよわのP侍
よの連うわあうとて世まへは
人候おへお事候とてわ頭
下部も

くつらきわてすくゆるものな
わやうの物も世おと家にな
きても入る候に
唐乃物と薬名
書ともハ
くさむうは
つてすくぬ
事き物を
たうとす
りとも
あも
候と
うや

やみひのちの馬牛行の身くらり
むらうのけきとあきて叶りぬ
物なれはつくりせんたはまのわあをく
つとめ人もまたわりとまに必要あるへ
きれとふことには物思はなま市に
もとめりしひともあわめんそ外の鳥獸
すへて用なきりのたわき家らるも乃ハ
おりにこめとさむをされともあきハ翅成
きつち慈よのしとて雲とくひ野山と思愁
やむ時なり——其思我りあもあつわり

思くくくハあん人はまこあ——庵んや
まをくらりけ目をよりり——むらハ
梁射り心ちり五子敵、まを飛せ——林小
なりぬをみえせうまうの友——きとん
くらりめうらにあひんめり——きと
あや——き獸園よや——ありんとも
又——もはあま
人徳才能ハ又あきくらり——聖教を
——は次第——は次はまのく
むらとらま事ハなませまなまら

学問もたよりありんか、形も次も醫術を
習ふ一力哉や、あひ人をたすを忠孝に
片とめも醫もあゝいそあふつゝ、以次も
弓射るも樂事、六藝もあせわりのあゝい
是ともかよつゝ、文武醫乃たまゝも、
うけたはあゝい、いれ哉學りんを、
いゝゝな人といふ、いゝゝ次に食を
人於命をわゝゝ味を潤志、たゝ人天なる
徳もいゝゝいゝ細工も、いゝゝ小要なり、
此外のいゝゝも、能ハ君子を、取らる也

詩哥小ゝゝみ小、徳行もあゝい、幽玄の道
思、臣是を、もゝくす、
只、我もらゝ世を治る事、漸を、
似ゝわ、金いすゝれ、
まゝ、

益益えゝゝい、
人ゝも、
思、
まゝ、
おゝい、

いふもむ所也。食物才二もきる物才三も
居る所なり人言れ大なり。計三。食也。以
飢い言。風雨も。さ。被。以。一。て
閑に過。以。た。乃。一。ひと。以。一。人。皆
病あり。痛に侵さ。まぬ。其。の。然。恐。一。
醫療を忘。食。一。以。薬を。く。一。て。四。乃。事
亦。以。さ。る。我。ま。う。一。と。以。計。四。一。け。さ。ゆ。を
と。あり。と。以。此。四。乃。名。を。も。あり。と。か。む。我
孺。と。以。四。乃。事。候。ゆ。な。う。け。誰。志。の。と。り
一。一。ひと。と。と。ん

是法は師ハ源王宗にリ。ち。以。と。以。ん。也。も
業。近。と。一。す。只。以。昔。念。佛。一。て。や。す。一。ふ
世。を。包。ひ。あ。わ。孫。也。と。あり。ま。り。一。
人。一。を。と。れ。て。四。十。九。日。を。過。す。と。或。聖。と
信。し。ゆ。一。は。説。法。の。身。一。と。く。一。は。諸。人。海。と
か。り。一。と。わ。守。師。と。わ。て。後。難。や。乃。人。と。も
の。法。に。ち。り。も。こ。と。に。く。あ。れ。う。と。く。笑。し
侍。行。と。感。一。あ。つ。り。返。事。と。或。大。法。云
何。と。も。修。ん。あ。ま。か。と。唐。乃。初。と。以。伏。な。ん
と。ん。と。一。ひ。と。り。一。は。あり。と。一。も。さ。め。し

おろしちわけをさぐるを御代が絶やうやハ
あるはまた人の酒すくむるとをの連
先づいふ人の志ぬまゝんとすは劔と
人をきつんとするに似つる也二おも
もはきつるも乃ちまじいものなる可まら
我乃ちきつる故に人をえきつるぬれり
そのまじ酔て臥ねる人をもめまらと
中劔とてきつるはみだわきるまや
いとむらゝゝわき
えらちま負きつるなりえらわぬくら

いせんときんりあひてはうはくく
立かつりけりけて勝つる可きまると
まゝつゝそ時を志るはきつりくら
つたつらと或老とた
あゝた免て益のきつるはあゝつめぬを
よゝんするなわ
雅房大御そハオゝうくま人
大ねもふかゝんやむらゝつる比院に
近習は人ぬ今後うゝまは我見侍つと
うきまじけは何ゆうととりあはるるに

たのよあううソすまの進をまけて人小
志ううの我方を後し人とき可
行るの志ううの我れあうひ少と勝負我
好人を勝て真あり人たれちちをのまきり
獲乃まきりうる事然るるこふき行
負て真あり覚ゆるまきり又志うう被たわ
承負て人まきりこりめんと思ひ文
あうひは真ありううし人よかひ
おもソせて志をまきりと南ん事徳に
うむらわむらまきり中よたりうるも

人をソうあきむきてまの進り智徳
まきりうる事と真あり是みれにあうひ
まきりうる事と真ありはたううなり
ううことむすあたうひは利に進ん
あうひまのむ失なり人小勝んぶと我
思ひ只學問しそ智と人よまきりん
たのよあううのまきりまきりまきり
かううひともううはあううのまきり
いあまを志ううの事然るる天なる織と
辞し利ともすううの只學問のまきり也

まづしき先、財をもちて礼を以て老に
有る力、汝もつて礼を以て老に
及する時、速にやむ、汝智と云ふは
此の事、く、人、能く、あ、ま、わ、ぬ、を、
志す、の、一、一、之、志、ぬ、を、け、む、け、む、の、ま、り
得、也、ま、つ、つ、て、分、と、志、す、を、速、に、ぬ、す、
力、有、る、汝、も、つ、て、分、と、志、す、を、速、に、ぬ、す、
為、る、乃、能、わ、る、也、ち、多、く、有、る、を、
号、の、は、あ、る、寸、昔、の、わ、の、名、の、元、良、親、王
元、日、儀、愛、賀、の、聲、喜、殊、勝、り、
元、日、儀、愛、賀、の、聲、喜、殊、勝、り、

よわき羽乃はくわはまきく、女くき、
李朝王能記る、
とる、能、わ、る、の、東、の、枕、を、わ、り、わ、る、
極、と、一、一、て、陽、氣、成、り、く、
東、首、一、一、の、寝、殿、乃、三、
考、り、る、也、白、河、院、の、水、首、
水、の、い、心、事、也、又、伊、勢、
高、方、を、清、治、の、
一、一、を、神、宮、能、
わ、り、る、也、

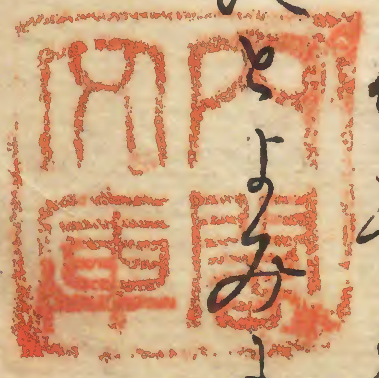
賢孝大細之入るやきくしき人
具氏掌中ね。遊ておめしめとしけん
程乃りし何事。形わた答申さくらんや
心しれけき度具氏いし侍らんとしけん
くるといしはあしひけん心しけん
そくしき事いしりしもまひしけん
侍しき事いしりし何とけん
うしけんしけんしけんしけんしけん
間もいしけんしけんしけんしけん
あしけんしけんしけんしけんしけん

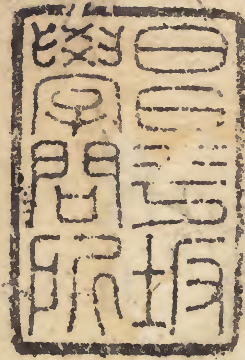
きんといしけんしけんしけんしけん
奥あるあしけんしけんしけんしけん
あしけんしけんしけんしけんしけん
まうけんしけんしけんしけんしけん
ありけんしけんしけんしけんしけん
やけんしけんしけんしけんしけんしけん
むまけんしけんしけんしけんしけん
しけんしけんしけんしけんしけんしけん
侍けんしけんしけんしけんしけんしけん
天御言のけんしけんしけんしけんしけん

事なまはしむるもつとひとひり終けるを
かゝるわらふきなり。お侍りしはよく侍事を
為すもいんこさう先中侍りしはよく侍りしは
大徳いんまきいん形をうへに裸のうりしは
せし終るわらふのうりし

くはし—お侍志をたはせし中侍りしは
さしういへ終るのまのわらふのふしまのわ
侍りしは侍りしはよく侍りしはよく侍りしは
ふしういへ終るのまのわらふのふしまのわ
ありきし侍りしはよく侍りしはよく侍りしは

侍りしと侍りしはよく侍りしはよく侍りしは
まのわらふ侍りしはよく侍りしはよく侍りしは
侍りしと侍りしはよく侍りしはよく侍りしは
つんより侍りしはよく侍りしはよく侍りしは
まのわらふ侍りしはよく侍りしはよく侍りしは
侍りしと侍りしはよく侍りしはよく侍りしは
かゝるわらふ侍りしはよく侍りしはよく侍りしは





文正乙亥

